
宴のゲスト

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宴のゲスト

【Nコード】

N6888H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

一九八二年ロンドン。この街にある異常な男がいた。男がある客を自分のアパートに呼んで開いた宴とは。そしてそのゲストが受けた惨劇とは。これは実際にあった事件をもとにして欠かせてもらいました。幽霊や魔物ではなく実際の人間の恐怖は如何でしょうか。

第一章

宴のゲスト

まず断っておくがこの話は本当にあったことである。このことを言っておきたい。嘘であるというのならそう思った方が精神衛生的に非常にいいことも言っておく。

何故ここまで言うかという他でもない、この話が非常に異常であり顔を背けたくなるまでにおぞましい話だからである。このことも前置きしておく。

前置きはこの程度にして本題に入る。これは一九八二年のロンドンであったことだ。

この男の名前は本名はわかっている。ただしあえて偽名にさせてもらう。ジャン・ジャック・リパーとしておこう。かの有名な切り裂きジャックの仇名だがこれを使わせてもらう。

ジャックは異常な男であった。この時二十六歳であったがもうアルコール中毒であり趣味は弱者をいたぶることであった。ホームレスや酔っ払いを拾っては彼等を時間をかけていたぶることを至上の喜びとしていた。

こうした人間は世の中にいる。残念なことだがこれも人間である。その極めて醜悪な意味において人間である彼にも仲間がいた。類は友を呼ぶというが彼等にしろそうであった。

彼の仲間は三人いた。ジャックを入れて四人だ。まずは墓堀人夫のエドガーにその愛人のエリス、そして街のゴロツキというかたむろしているチャーリーという若い男だ。誰もが弱者をいたぶることを至上の喜びとする者達であり酒によつては身の毛もよだつゲームを行っていた。それは人がいない場合は動物になる場合もあった。『やり過ぎ』になろうともそれでも彼等にとってはどうでもいいことであった。

その彼等はこの日パブにいた。イギリスという国は階級が厳然と

残っておりその階級によって飲む場所も違う。

彼等のような者達はダウンタウンのバーで飲んでいる。場所はウエストエンドである。やはりあの切り裂きジャックがかつて『活躍』したその場所である。

そこで安いが効き目のあるラム酒を四人で飲んでいた。木造の古ぼけた店の中は褐色でモルトと煙草の臭いに満ちている。その安煙草の臭いの中で彼等はあれこれと話をしていた。

「今日はどうするんだい？」

「どうするって？」

「だからパーティーだよ」

チャーリーがこうジャックに尋ねてきた。

「パーティーな。誰か手頃なのはいないのかい？」

「いないな」

ジャックはその問いに詰まらなさそうに答えるのだった。

「今のところな」

「じゃあ犬か猫でも捕まえるの？」

エリスは面白くなさそうにこう言った。

「それじゃあ」

言いながら煙草をすばすばとやる。だがそれは煙草ではなかった。見ればそれはマリファナであった。それを吸ってハイテンションになっているのだ。

「そうするの？」

「何かな。それもな」

エドガーはそれを聞いてつまらなさそうに述べた。

「面白くねえな。っていうかな」

「っていうか？」

「最近犬とか猫ばかりだろ？」

エドガーはラム酒を乱暴にあおりながら言うのだった。

「飽きたぜ。もうな」

「そうだな」

ジャックもそれに同意して頷くのだった。

「今日はやっぱりあれだよ」

「人間ってわけだよ」

「それも派手にやりたいな」

何でもないといった口調だった。

「派手にな。もうぶっ壊す位にな」

「ああ、それいいな」

エリスのマリファナを拝借してそれを吸いながら応えるチャーリーだった。

「最近ストレスも溜まってるしな」

「だからさ。どうだ？」

ジャックはあらためて仲間達に提案した。

「今日は人間でな」

「人間でかよ」

「俺もそれがいって感じなんだよ」

あくまでその場での感じというもので語るのだった。彼もまたマリファナを吸いその気分を向上させていた。そうしてそのうえで言うのだった。

「今日はな」

「じゃあそうするか？」

「そうね」

エドガーとエリスはそれで納得した。

「それであんたはどうするの？」

「俺か？」

「そうよ。どうするの？」

エリスが最後の一人であるチャーリーに尋ねた。彼もラム酒とマリファナでもう正気を失っていた。最初から正気があったかどうかは疑問だが。

「あんたはさ」

「俺か。まあそれでいいな」

「いいんだな」

「ああ、楽しくやろうぜ」

こうジャックにも答えるのだった。

「楽しくな」

「よし、これで決まりな」

「ええ」

エドガーとエリスがここで頷き合う。

第二章

「それでいくか」

「あとは相手だけれど」

「手頃なのいないか？」

チャーリーもそれに入って早速まあずは店の中を見回した。に住人近くが広いパブの中で飲んでいる。その中でジャックは一人を指差した。

「おい」

「んっ!？」

「どうした？」

「あのおっさんな」

一人でカウンターに飲んでいる男を指差したのである。彼等の席からは後姿しか見えない。だがその身体つきはやたらといいものであった。

大柄であり背中も引き締まっている。ジャックが指差したのは彼であったのだ。

「どうだい？」

「そうだな。がたいもいいしな」

「いたぶりがいがあるわね」

エドガーとエリスが最初に彼に賛成した。

「俺はあのおっさんでいい」

「あたしも」

二人はそれでいいとしたのだった。

「それで俺もな」

「よし、これで決まりだな」

ジャックは最後の一人であるチャーリーの言葉も聞いてそれで決まりとした。そうして彼等を代表してジャックがその男に声をかけたのであった。

カウンターの方向に向かい声をかける。友好的なのを装って。

「なあ」

「何だ？」

振り向いたその顔も引き締まっている。口髭が目立つ。歳は四十程度だろうか。その彼がジャックに対して振り向いてきたのである。

「あんたは」

「あんたと一緒に飲みたくてね」

にこやかに笑って切り出したのだった。

「どうだい？一緒に楽しくやるかい」

「悪くないな」

男は彼のその友好的な態度に機嫌をよくしたのか笑顔で返してみた。

「それじゃあ一緒にやるか」

「ああ。それじゃあな」

こうしてジャック達はこの男を引き込んだ。場所をカウンターに移しそのうえで飲む。その時に彼の身の上のこともじっくりと聞くのだった。

「へえ、ボクサーかい」

「そうさ」

男はビールを飲みながら彼等に述べた。

「アマチュアだけれどな」

「だからそんなに引き締まった身体をしてるんだな」

「これでもトレーニングは欠かさなくてな」

男は陽気に彼等にまた話した。やはりその手にはジョッキがある。

「こうして飲んだ次の日もランニングさ」

「真面目だねえ、本当に」

ジャックはそれを聞いて赤ら顔で笑った。

「まるで俺みたいだよ」

「へえ、あんた真面目なのかい」

「そうさ」

気さくな笑みを作ってみせての言葉であつた。

「真面目だよ。本当にな」

「そうだよ。真面目がいいんだよ」

男も笑顔で話した。

「何でもな」

「飲むのもかい？」

「そうさ」

こうエドガーに答える。

「真面目が一番だよ。本当にな」

「じゃあ真面目に楽しむか」

「ああ」

ここで何気なく彼をさらに引き込むのだった。

「どうだい？ここじゃもうお開きにして」

「別の場所で飲むのかい」

「俺のアパートにこないか？」

ジャックはこう男に提案するのだった。

「俺のアパートにな。どうだい？」

「悪くないな」

そして男もそれに乗るのだった。

第三章

「じゃああなたのアパートに厄介になろうか」

「酒なら何でもあるぜ」

ジャックはさらに明るく男を誘った。

「だからな。楽しくやろうぜ」

「ああ。それじゃあな」

男のその言葉を聞いてジャック達は目で頷き合った。そうしてそのうえでやはり目だけで笑い合う。それからウエストエンドの彼のアパートに入って。そこでまた飲むのだった。

「ほら、ウイスキーな」

「ああ、これか」

「ぐいっとやってくれよ」

実際にジャックはそのウイスキーをストレートで飲み干した。それを男にも急かすのだった。仲間達も同時に飲んでいる。部屋の中は殺風景で何もない。テレビと食器棚に今彼等の座っているテーブルの他は何もない。そんな殺風景な部屋であった。

「こういうふうにな」

「ああ、それじゃあな」

男もそれに応えてそのウイスキーを飲む。やはり一気だった。

「いいねえ」

「気持ちよくやったね」

「ああ、好きだからな」

男も笑顔でエドガー達に対して答えた。

「ウイスキーが一番な」

「いいことだよ。やっぱりあれだよ」

チャーリーは相変わらずマリファナを吸っている。そのうえで男に話すのだった。

「ウイスキーはすぐにながつんとくるからな」

「そうさ。だから酔いたい時にはこれだよな」

「全くだぜ」

まだ明るい話であった。その時にジャックは男に対して尋ねたのだった。

「それでさ」

「ああ。今度は何だい？」

「あんたの名前だけれどな」

彼が今度尋ねたのはこのことだった。実はまだ名前を聞いていなかったのだ。

「何ていうんだい？」

「俺の名前かい？」

「そうさ。何ていうんだい？」

このことを彼に尋ねるのだった。

「あんたの名前な。一体」

「俺か。俺はヘンリーっていうんだ」

「ヘンリーかい」

「ヘンリー＝グライム」

こう名乗るのだった。

「これが俺の名前さ」

「リングネームもそうかい？」

「そうさ」

もう一杯ウイスキーを飲みながら笑顔で答えるのだった。

「その通りさ。そのまま使ってるんだよ」

「わかったさ。じゃあ覚えておくな」

「頼むぜ。またすぐに試合があるからな」

「ああ」

彼がそのヘンリーの相手をしているうちにだ。エドガーが彼の後ろに回り込み食器棚の中にあるものを取り出してきた。それは本来食器棚の中にはないものだった。

鉈であった。とてつもなく大きな鉈であった。それを持って来て

まだジャックと楽しく話しているヘンリーの真後ろに来てそのうえで。その鉋を思いきり振り下ろしたのだった。

「ぐっ……」

彼は何が起こったのかわからなかった。そのまま意識を急激に失っていく。こうしてここで意識を失ったことは彼にとってせめての幸せであった。

彼はそのまま前に倒れ込んだ。頭の後ろからどくと濁った血を流している。この時点でまだ生きているかどうかは不明であった。しかしそれだけではなかった。ヘンリーが倒れるとジャック達は満面に笑顔を浮かべてそのうえで。すぐに彼をシャワールームに連れて行った。

「用意はできているよな」

「ああ、勿論な」

「それはできているわ」

またエドガーとエリスがジャックの問いに答える。四人がそれぞれ頭から血を流しそれで床を汚しているヘンリーの両手両足を持っていた。

「よし、じゃあな」

「これを放り込んでな」

「まずは茹でるか」

さながら食材、しかも肉を茹でるかのような言葉であった。

「それからだな」

「それにしてもよ」

ジャックはへらへらと笑いながらチャーリーに尋ねた。

「こいつ生きているかな」

「さあな」

ヘンリーは平然と笑って彼に返した。

第四章

「それはどうかな」

「死んでるのかい？」

「どっちでもいいさ」

その平然とした顔での言葉であった。

「生きていようと死んでいようとな。どっちでもな」

「まあそうだな」

チャーリーも笑みで彼に返した。その笑みにはやがて狂気も含まれていった。

その笑みは彼だけではなかった。四人全員にである。彼等はその生きているのか死んでいるのかさえもわからないヘンリーをシャワールームに連れて来た。タイルのその場所はユニットになっており浴槽にはもう煮えたぎった湯が並々と入れられ湯気を立てていた。

「いいか？」

「ああ」

「ここに入れるんだな」

「そうさ」

ジャックは三人に対して述べた。

「一気に放り込むぞ。いいな」

「よし、それじゃあ」

「一、二の」

「三！」

息を合わせてそのうえでヘンリーをその浴槽の中に放り込む。バシャン、という音と共に派手にその湯の中に放り込まれると。頭の血で急激に濁っていくその湯の中でその身体が赤く染まっていく。そうしてその中で皮膚がズル剥けになっていくのであった。

「ヒャッハハハハハハハハ！」

ジャックはその皮膚が剥けていく彼を見てけたたましく笑った。

「どうだよ、見ろよ！」

「ヒヤハハハハハ、そうね！」

「おい、まるでスープの中のトマトだぜ！」

エリスもエドガーもこう言って狂気の笑いを浮かべる。

「何か肉まで見えてきたぜ！」

「どうだよ、いいアイディアだろ」

ジャックはその肌を剥けさせていくヘンリーを指差して転げるようにして笑っていた。

「こうやってな。スープを取るってのはな」

「そうだよな。相変わらずセンスいいぜ」

チャーリーもまた腹を抱えて笑っていた。

「これで後はどうするんだい？」

「こいつを引き摺り出すだろ」

「ああ」

今度はその湯から引き出すというのだった。

「それでな。チェンソー出すだろ」

「あれか」

「そうさ。あれを出すんだよ」

ジャックは笑い続けながら言葉を出していく。

「それで手も足もばらばらにしてな」

「あと鉋もまたあるぜ」

その鉋でヘンリーを打ったエドガーが言った。

「これも使うよな」

「勿論さ」

それもだというのだった。

「それでも使ってたな」

「そうか。じゃあそれも使ってたな」

「ばらばらに切り刻んでやるぜ」

ジャックは満面の笑みを浮かべながらとりあえず湯を引き抜いた。その濁った血で真っ赤になった湯が急激に落ちていく。そうしてそ

れがなくなると彼を引き摺り出した。

身体は反射的な痙攣を続けていた。それを見ると生きていたのかも知れない。だが四人にそのチェンソーと鉋で切り刻まれている時にはもう助かることは不可能になっていたことは間違いない。

両手両足をばらばらにされ達磨のようになった身体が床の上に転がる。そこにジャックが異常な笑い声をあげながらその首にチェンソーを下ろしたのだった。

「ギャヘヘヘヘヘヘヘヘヘッ!!」

やはり不気味な笑い声を出しそのチェンソーで首を切っていく。チェンソーの耳をつんざくような音が部屋に響きそれで首を切っていく。首は忽ちのうちに鮮血を撒き散らしながら切られていき肉も飛び散る。そうして遂に落ちてしまったのだった。

ジャックはその首を両手で持ってそのうえでテーブルの上に乱暴に置いた。彼はそれを置きそのうえで椅子にどかりと座り込んだ。

そのうえでまずは一杯やるのだった。

それから。彼は言った。

「腹が減ったな」

「ああ、そうだな」

「運動したしね」

彼等はそのジャックの言葉に応えて言った。

「何か食うか？」

「そうだな。脂っこいのがいいな」

「中華料理にする？」

エリスがこう提案するのだった。

第五章

「それとビールでも」

「ああ、いいな」

「それでいくか」

他の面々もそれに頷くのだった。

「じゃあ近くのレストランで唐揚げとか春巻きでも買ってな」

「餃子もいいわね」

気軽な話をしてそのうえで部屋を出る。そうしてそのうえでジャックの部屋を出る。その時彼等は泥酔していたうえ麻薬もやっていた。だから自分達には気付かなかったのだ。

鮮血であちこちが染まったその格好で外に出てそのうえで街を歩く。これには誰もがぎよつとなり目を瞠ってしまった。誰もがそうなるものだった。

「何だあれは!？」

「あいつ等何をやったんだ!？」

ウエストエンドの者達はそれを見て驚きの声をあげた。

「まさかと思うが」

「いや、間違いないな」

「やったな、あいつ等」

すぐにこう察したのであった。

「おい、警察に連絡しとくか？」

「そうした方がいいよな、やっぱり」

「そうだよな」

こんな話をしたうえで彼等は動いた。四人はそんなことは知るよしもなくへらへらと笑いながらその血糊を見て唾然としている店員から料理を買いそのうえで道を歩いていた男に因縁をつけ喧嘩をした。

ジャックはこの相手の顔に何と三十針も縫う程の大怪我をさせて

いる。そうしてこの相手を口汚く罵倒してから部屋に帰りその鮮血で染まった部屋のテーブルに座りそれから飲み食いをはじめたのだった。

テーブルの上にはまだヘンリーの生首がある。彼は白目を剥き口から舌を出して事切れた顔をしていた。顔は熱湯に入れられたせいで肌はズル剥けで肉も壊死を起こし実に惨たらしいものであった。皮膚が壊れているので当然髪の毛もあちこちが抜けて無残さを余計に見せていた。その髪の毛は浴槽に残っていた。まだ流されてはいないものも多くあったのだ。

だがジャック達はその生首を逆に食べ物を置く台にしてその周りにも料理やビールを置きそのうえでまずは乾杯した。周りには、いや天井までが鮮血に染まったその部屋の中で。

「ヒヤハハハハハ、美味しいなおい」

「そうだな、全くな」

エドガーはその部屋の中でジャックの言葉を受けて笑いながらビールを飲んでいた。

「身体を動かした後のビールは美味いぜ」

「あんたもそう思う？」

エリスは視点の定まらない目でヘンリーの生首に話し掛けてきた。

「あんたは。どうなの？」

「ああ、そう思うさ」

チャーリーがここでこう言った。

「エキサイトしたよ、おかげでさ」

腹話術のつもりだった。それで話したのである。

「こんな楽しいことってないよ」

「当たり前さ。俺が演出したパーティーだぜ」

ジャックは手掴みで唐揚げを食べながら述べた。途中一個落としてしまいテーブルの上に転がった。血糊で汚れるが彼はそれを戸惑うことなく口の中に入れた。

「悪い筈がないだろ？」

その唐揚げを食うと血で口の中はおろか唇まで汚れる。しかし彼はそんなことは意に介さず平然として食べ続けるのであった。

「違うか？」

「いやいや、その通り」

「満足させてもらったわ」

彼等はそのジャックの言葉に応えて述べた。

「おかげでな。またしうぜ」

「そうね。またすぐにね」

こんな話をしながら暴飲暴食に入りそのまま潰れてしまった。彼等が潰れて暫くしてからジャックの部屋の前に私服の男に連れられた私服の男達がやって来た。

「ここだな」

「はい、そうです」

「ここです」

制服の男達が私服の男の問いに答えていた。

「ここがリッパの部屋です」

「間違いありません」

「そうか。ここか」

私服の男は彼等の言葉を聞いてまずは頷いた。

「あいつの部屋か」

「前から色々と嫌な噂のある奴でした」

「実際に罪も犯してきていますし」

制服の警官達は顰めさせた顔でその鉄のドアを見ながら述べた。

第六章

「警部も御存知ですよね、奴のことは」

「それこそ前科が幾つもあった」

「ああ、わかっている」

警部と呼ばれた私服の男も彼等のその言葉に頷いた。

「それはな」

「それで今回の騒ぎですか」

「一体何をしたんでしょね」

「嫌な予感がする」

警部の顔がここで曇った。

「何があっても驚くなよ」

「何があってもですか」

「勘だな」

長年の勘というものだった。警官としての。

「奴は恐ろしいことをしでかした。それが窺える」

「今中では何もないようですね」

「静かですね」

「しかし注意しろ」

警部の警戒の念は解かれてはいない。それどころか余計に強いものになっていた。

「何をしてくるかわからないからな」

「はい、それじゃあ」

「何時でも撃てるようにして」

全員拳銃を抜いた。本気で警戒している証だった。

そうして警部がドアノブに手を当てる。そうしてそのうえで扉を開けようとする。

鍵はかけられていなかった。そのまま開いた。そうして一斉に銃を構えたまま部屋に雪崩れ込み。そのうえで部屋の中を見た。

「なっ・・・・・・・・」

「何だこれは」

警官達は部屋の中を見て思わず我が目を疑った・

部屋の壁も床も天井さえも血で染まっている。とりわけ床は血溜まりになっていてまさに血の海だった。濁った赤い血で染まっていた。

そしてあちこちに肉片や身体だったと思われるものが転がっていた。それも赤く染まっていたので一目見ただけでは何もわからない。そしてテーブルの上には食べ残しが転がっておりそれも鮮血に染まっていた。やはりそこも血溜まりができていて。そして。

「お、おい」

「ああ、首だ」

警官達はそのテーブルのあるものを見て震えだした。そこにあるヘンリーの首を見たからだ。

「首だな、あれは」

「本物だ」

その肉からわかったのだ。やはり鮮血に塗れ髪の毛がまばらになり肌は無残に剥け白目を剥き舌を出しているその生首が本物だということを。悟ったのだった。

それを見て何人かの警官は思わず嘔吐してしまった。無論視覚だけでなく嗅覚にもくるものがあつた。部屋は血の生臭い匂いで満ちていたからだ。

そのうえ部屋のあちこちにはゼリーのようなになった血漿が転がっている。それが何故かブルブルと震え生き物のように見えてさえた。

四人はそのテーブルにもたれかかり或いは床に倒れ込み泥酔して転がっていた。当然ながら即座に逮捕されてしまった。

裁判は速やかに行われた。四人の証言を聞いた判事も何とか平静を保ちながらこう言うなかりであった。

「彼等は他人に苦痛を与えることでしか快楽を感じられない類の人

間だ」

「そんな人間がいるのですか？」

判事から話を聞いたマスコミ関係者の中には思わずこう問い返す者もいた。

「そんな異常な人間が」

「残念だがいる」

これが判事の返答だった。

「私もそれが今わかった」

「そうなのですか」

「殺人事件も数多く聞いてきた」

判事は苦々しげな口調で次にこう述べた。

「しかし」

「しかし？」

「それでもこれだけ身の毛がよだつケースを私は他に知らない」

こう言うのだった。裁判の際話を聞く陪審員達も吐き気をもよおす者が幾人もいた。

ジャックは懲役二十五年になり他の三人は懲役十五年になった。

イギリスでは死刑がなくこういう判決になったのである。

これでジャックが反省する筈もなく判決を聞いて判事に罵声を浴びせかけた。

事件はこれで終わったが何故彼等の名前を偽名にしたのか最後に書いておきたい。実はジャックの本名はもうわかっているのである。しかしジャックは死刑になってはいない。彼は生きているのだ。しかも懲役二十五年なので既に出所している可能性が極めて高い。この男は今もロンドンを彷徨っているかも知れない。それを思うとあまりの恐ろしさの為に本名を出すことが躊躇されたのだ。

この事件は一九八二年に起こり彼はおそらく出所している。このことはよく覚えておかなくてはならない。そう、ロンドンには今もこの異常な殺戮者が蠢いているかも知れないのだ。霧の都に蠢く魔人は切り裂きジャックだけではない。過去だけでなく現在もいるの

だ。

宴の
ゲスト

完

2
0
0
9
・
6
・
2
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6888h/>

宴のゲスト

2010年10月8日15時57分発行